

常照

佛教大学附属図書館報

2014

NO. 61



佛教大学附属図書館



大学図書館の新たな課題に向けて

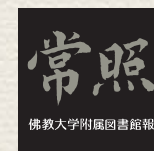
加速するグローバル化時代を迎え、ますます厳しい国際競争に立たされる日本は、他方で先進国が経験したことのない社会縮減に向かっています。国の内外から押し寄せるこのような現実を前にして、高等教育を担う大学への期待は大きく、その対応が焦眉の急となっています。インターネットの普及とともに電子化された情報の生産と流通が進むなかで、期待にこたえるべくこれまで以上に、学術情報環境の拡充整備が求められます。

佛教大学では、外部から提供される電子ジャーナルやデータベースだけでなく、学内に収蔵された図書・雑誌などの文献資料を電子データベース化し、学外の電子情報と併せて、「的確でかつ素早いアクセス」が二元的に可能となるウェブサイトをいち早く構築し、利用に供してきました。大学図書館は、学術情報基盤として学部教育と研究に深く結びついています。しかし、もう一方で、大学図書館は、文献資料の系統的、体系的な収集を担っており、高度な専門性と独立性を備えた運営が求められてきました。今や学術情報の電子化の流れは「検索機能」を超えて、課題の「発見機能」のようなより高度に専門的力量の求められる時代を迎えています。

私たちはこの5年、アクセス・サービスの向上を目指して、計画的に取り組んできました。この間2012年、大学は開学100周年の記念すべき節目を迎え、図書館もまた決意を新たに次の100年に向かって一歩を踏み出しました。学生諸君が問題意識を高めて、主体的な学習を目指す「図書館の能動化の試み」が多くの大学で行われるようになっていきます。これは図書館だけの力で実現できることではありません。学部と意志疎通を図りながら教学を支える部門と連携し、充実した仕組みの構築を目指したいと願っています。

附属図書館長

谷口浩司



2014 NO. 61

目次

大学図書館の新たな課題に向けて

附属図書館長 谷口浩司

1

デジタルコレクション公開

『京洛三十六家 山水花鳥人物図貼交屏風』

2

~36人の絵師たちと前川家~

4

京都国立博物館・水谷亜希／佛教大学総合研究所・尾脇秀和

佛教大学大学院・稲吉昭彦／附属図書館・松島吉和

新収資料紹介 『京童』

『山城四季物語』

『山城名勝志』

『都商職街風聞』

『花洛名所獨案内記』

図書館専門員 古川千佳

11

Interview 中国古典・思想史の世界を訪ねて

文学部中国学科教授 鵜飼光昌

20

図書館とわたしの研究

社会学部公共政策学科教授 藤井透

24

佛教大学附属図書館の事業活動報告 2013年度～2014年度前半期

28

佛教大学附属図書館の沿革と「成徳常照館」の由来

29

『京洛三十六家山水花鳥人物図貼交屏風』

『京洛三十六家山水花鳥人物図貼交屏風』は、京都六角通油小路東入ル本能寺町で両替商などを営んでいた前川五郎左衛門家に伝わったもので、平成15年（2003）に文書やその他の調度品類と共に佛敎大学附属図書館の所蔵となりました。以来、文書の目録作成にあつての調査整理を重ねるうちに、多くの史料の中に数点の屏風があることが判明し、平成23年（2011）になって存在が確認され、修復に1年以上の歳月を費やした後、平成26年7月（2014）から図書館ポータルサイト上でデジタル画像を「一般公開コレクション」として公開しています。

この屏風は六曲一双で、右隻、左隻とも総寸は縦171・2cm、横378・0cm。地に銀箔を敷き詰め、36枚の絹本着色図が貼り込まれています。それぞれの図の寸法は、縦25・8cm、横38・0cm前後。円山四条派を中心に、土佐派や京狩野派も含む京坂で活躍した絵師36名の作品であり、当時の画壇の縮図ともいえる歴史的にも大変貴重なものです。

前川家文書の整理と屏風の発見

佛敎大学附属図書館事務部長 松島 吉和

佛敎大学附属図書館では、江戸時代後期に京都六角本能寺町に居を構えて、両替商をはじめ京都御用米会所貸付方などに携わっていた前川五郎左衛門家に伝来した文書類を、平成7年（1995）と平成15年とに入手し、平成10年（1998）4月から平成17年（2005）3月まで、当時の文学部史学科教授の竹下喜久男先生の指導のもとで文学研究科日本史学専攻の大学院生の皆さんに調査整理していただき、その成果を『京都本能寺町前川五郎左衛門家文書目録』第1巻～第3巻として刊行しました。

平成15年に入手した前川五郎左衛門家の資料には、文書だけでなく調度品も含まれており、一旦広沢キャンパスにあるアジア宗敎文化情報研究所（現宗敎文化ミュージアム）に預けて燻蒸処理が施された後に図書館へ収蔵したのですが、そのため一部の調度品についてはまだミュージアムに保管されている状況です。

平成22年（2010）4月に事務部長として着任した際に、当時の歴史学部長の渡邊忠司先生から中断していた前川家文書を含む古文書の整理を再開するように依頼を受け、大学院生の皆さんの協力を得て、平成24年（2012）3月には『京都本能寺町前川五郎左衛門家文書目録』の第4巻目が刊行できるまで古文書類の整理も進んできたのですが、整理途中の平成23年3月に、調度品の中で忘れられていた屏風の存在が明らかになってきたのです。

そこで貴重書庫に保管されている資料を改めて確認することになり、渡邊先生、図書館長の谷口浩司先生と大学院生の皆さんと人つてみてみたら、どうも屏風の箱らしいものがあり、開けてみると江戸後期の有名な絵師の名前が記された絵が貼られた銀屏風だったわけです。

今回は古文書の調査整理に携わっていたいたり、屏風の調査分析をしていただいたりした研究者をお招きして、詳しくお話を伺うことにしました。



左隻



右隻

各扇に貼られた作品					
第16図 東東洋「雪景茅屋図」	第13図 狩野永俊「雪景楼閣山水図」	第10図 河村文鳳「李適之図」	第7図 森狙山「親子猿図」	第4図 松川龍椿「朝顔図」	第1図 原在中「蘭石図」
第17図 中島来章「大原女図」	第14図 大原吞舟「韃靼人狩獵図」	第11図 月潭「武陵桃源図」	第8図 岸岱「松に鶴図」	第5図 円山応震「虎溪三笑図」	第2図 森徹山「虎図」
第18図 土佐光孚「王朝美人図」	第15図 村上東洲「茅屋山水図」	第12図 吉村孝敬「鴨図」	第9図 八田古秀「亀図」	第6図 田中日華「撫子図」	第3図 月橋「松下高士図」
第16図 橘公順「黄安図」	第13図 上田耕夫「柳堤舟遊図」	第10図 柴田義董「樵夫図」	第7図 月峰「瀑布図」	第4図 紀広成「梅に文鳥図」	第1図 岸駒「旭日飛鶴図」
第17図 吉村蘭洲「溪流図」	第14図 中林竹洞「松堤舟遊図」	第11図 松村景文「遊亀図」	第8図 矢野夜潮「浦島図」	第5図 西村楠亭「住吉踊図」	第2図 合川珉和「毬杖図」
第18図 長沢芦洲「あけび図」	第15図 円山応瑞「鮎図」	第12図 村上松堂「秋海棠に小禽図」	第9図 別所東溪「嵐山春景図」	第6図 長山孔寅「韓信股潜図」	第3図 山口素絢「笑い上戸図」

『京洛三十六家 山水花鳥人物図貼交屏風』

～ 36人の絵師たちと前川家 ～

松島 本日は本学附属図書館が所蔵している

前川五郎左衛門家に伝来した文書の整理や『京洛三十六家山水花鳥人物図貼交屏風』の調査研究に携わっていただいた方々にお集まりいただきました。屏風そのものが持つ価値や作品を描いた絵師たち、また所有者である前川家のことなどについてお話しいただければと思います。

尾脇 屏風を見つけた時のことですが、文書整理の際、貴重書庫の中に程良い高さの大きな横長の箱があり、ちょうど記帳台のようになっています。箱の横をチラリと見たら「前川」と書かれていて、これが前川家の屏風じゃないかと思ったので、松島事務部長にお願いして開けてみることにしたんです。

稲吉 この箱は他の史料とは明らかに何か違うものではないかと思っていました。貴重書庫の中で中身を確認してみたら、銀屏風でした。

尾脇 長いこと放置されていたわりに開けたらピカピカで。

稲吉 屏風に貼ってある絵を見たら、聞いたことがある絵師の名も出てきて。

尾脇 狙仙の猿というのは有名な作品だなと。

松島 これは大変貴重なものではないかと思いましたが、ただ、真贋がわからない。やはり美術史を専門とされる研究者に見ていただくのが一番だろうということで、当時京都国立博物館におられた山下善也学芸部連携協力室長に連絡させていただいて、確認していただくことになりました。屏風を発見したのが平成23年3月のことで、三双あった屏風を6月に宗教文化ミュージアムへ全部持ち出して山下室長に見ていただいたところ、三双のなかでこの銀屏風が最も価値の高いものだが、このまま保管しておけば劣化が進むとい

うお話しでした。早速、谷口先生や渡邊先生

が山極伸之学長に修復の必要性を説明されて予算措置がなされました。翌年の2月、修復の作業を始めることになり、それに先立って屏風を公開して記者会見をいたしました。

山下先生のもとで調査していただいた水谷亜希さんの調査によると、『平安人物志』の中に記載されている絵師たち、それも円山派や四条派、狩野派、岸派の著名な絵師たちが描いたものだということがわかってきました。本学は屏風のような美術資料としては他に『洛中洛外図屏風』を所蔵していますが、近世画壇に名を残す絵師たちの作品を貼った屏風が発見されたことで、図書館としてはさらに当該分野の研究に貢献できると考えています。この屏風の所有者であった前川家についてお話しいただけますか。前川家はもともと商人ではなかったのですか？

屏風を作らせた前川家とは

尾脇 京都前川家の初代、恵比須屋莊兵衛義虎という人は、近江国浅井郡川道東村の百姓五郎左衛門の子です。義虎は延享元年（1744）に京都に出てきたようです。奉公先は、大宮通三条上ル町で両替商（本銭屋）を営む夷屋（恵比須屋）治兵衛。義虎は治兵衛から暖簾分けを許され、恵比須屋莊兵衛の名で独立します。その後、商売が軌道に乗り、義虎は本能寺町（六角油小路東入町）で家持となった。これが安永5年（1776）のことです。以後、前川家は代々本能寺町に根拠をおきました。義虎には子どもがなかったため、奥さんの弟（石田武惟）を養子にしますが、義虎が亡くなった4年後に亡くなっています。武惟の次はその甥にあたる義秀が継ぎます。この人が3代目恵比須屋莊兵衛で、ちょうどこの屏風の時代の人です。のちに中興の祖といわれる人で、義秀の代には、旗本杉浦家の掛屋を務めたりして、事業規模が大きくなり、

次の義陳の代になるとさらに大きくなります。ちょうど屏風の制作時期に近い文化文政期がひとつの画期で、このあたりを境にして前川家は両替商から御用町人へと発展していくという感じですね。

稲吉 義秀の代は両替商（本銭屋）をやっていました。この屏風が作られた時にはちょうど還暦ぐらいでしょう。四代目の義陳のときに御用米会所貸付方という、公金運用を担う御用町人となります。文政10年（1827）に御用米会所貸付方の業務を引き請けるのですが、文政12年（1829）に義陳は御用米会所貸付方を御用米会所から独立させるんです。その時に手切れ金ではないですが、銀60貫目という金額を御用米会所に支払っているのです。

尾脇 それまでは恵比須屋莊兵衛という名前でしたが、文政13年（1830）に御用米会所貸付方としては苗字御免となり、この時から前川莊兵衛とも名乗るようになりました。我々が口にしている前川五郎左衛門という名

前が出てくるのは、莊兵衛（義陳）が改名する

天保3年（1832）からです。天保7年（1836）には、もともと本家であった夷屋（恵比須屋）治兵衛に屋号や暖簾を返す手続きを取っています。義虎以降続いていた治兵衛との本家・別家という関係は、この時に解消されました。義陳の代には京糸割符年寄になったり、郷土株や地下官人株を買ったり、その他大名・旗本・寺院の用達、掛屋などを務めています。前川家を単に京都の商家とは、なかなか言いにくいですね。

水谷 独立するために支払った額が銀60貫目ということですが、金だとどれくらいの価値になるのでしょうか？

稲吉 その当時の京都や大坂、いわゆる上方は銀遣いですから、銀60貫目を直すと金千両に値します。

尾脇 それをボンと渡している。御用米会所貸付方を一手に引き請けるということは、自分の裁量で公金の貸付運用ができるわけです。公金の貸付運用で自己の利益を生むんで



水谷 亜希
京都国立博物館
学芸部 教育室 研究員



尾脇 秀和
佛教大学総合研究所
特別研究員



稲吉 昭彦
佛教大学大学院
文学研究科日本史学専攻
博士後期課程



松島 吉和
佛教大学附属図書館
事務部長

【御用米会所】…享保20年(1735)に京都と大津に設立される二条御蔵からの払米を取り扱う会所。京都の御用米会所には米方と貸付方が存在した。貸付方は文政10年(1827)に前川義陳が業務を引き請け、文政12年(1829)に前川義陳が御用米会所から独立させる。

【京糸割符】…京都の糸割符仲間。近世後期、糸割符制度は全く形骸化しており、「京糸割符」は苗字帯刀などの諸特権をもつ特権町人身分と化していた。「糸割符株」として売買され、前川義陳も天保6年(1835)に買得した。仲間の代表を京糸割符年寄という。

【郷土株・地下官人株】…京都の「郷土」は、苗字帯刀を許可された百姓の一代限の身分。地下官人は朝廷に仕える下級官人の総称で苗字帯刀する。いずれの身分も、実際には「株」として売買されていた。

屏風は富と名声の象徴!?

すよね。それもかなりの額だったと思います。

稲吉 屏風が作られた文化13年（1816）ごろという時期は、ちょうど家督が義秀から義陳に移るときだと思います。義秀のこれまでの成果と義陳のスタートというちょうどその節目にあたります。それが象徴的ですね。

水谷 なんだかイメージがわいてきます。そういう時にこの屏風が作られたものなんだと。

松島 義秀は前川家の年譜では文化12年（1815）に隠居して、翌文化13年で還暦を迎えていますし、義陳の家督相続の時でもあるのならば、その祝いに作られたのかもしれないね。

尾脇 その時、義陳は23歳か24歳くらい。義陳は元治2年（1865）に73歳で亡くなるまでぜんぜん休むことなく活動し続けています。夷屋治兵衛との縁を切るというのも、もともと恵比須屋本家である治兵衛よりも商才に長けていたからでしょう。前川家の方が発展していったわけですから。

松島 稲吉さんも論文に書かれています。御用米会所の貸付方を独立させて公金運用をしようと考えたのは、両替商だけではあまり利益が上がらないと考えたのでしょうか。

稲吉 二条御蔵御囲米代金銀と京都町奉行所の金銀という莫大な額を運用するのですから、利益は非常に大きいと思います。

尾脇 公金を運用して上納分を払ってしまえば、残りの利益は全部自分の手に入る。今で言えば、年金基金を運用して自分の利益を上げるような感じかもしれない。

稲吉 安政2年（1855）に義陳が5代目の義貞に譲渡した現銀だけで銀770貫748匁5分ですから、恐ろしい金額です。

松島 郷土株を買ったり、尾脇さんが論文に書かれたりしているように糸割符の株も手に入れていますね。

尾脇 郷土株は壬生の八木家から買っています。新選組の屯所があった八木家。形式的には義陳の息子、義貞の名前で。糸糸割符年寄としての御用会符は、史料のなかに現存しています。江戸参府の時のものです。義陳は最初、恵比須屋壯兵衛、父親と同じ名前から始まって、前川壯兵衛、前川五郎左衛門と名字を名乗り、帯刀もできるようになり、経済的な上昇とともに身分も、緒に上昇させていった。

稲吉 壬生の郷土株、糸糸割符株、お金によつていくつか身分を手に入れているのですね。御用米会所貸付方も義陳が引き請けたときは不採算部門でした。でも御用米会所貸付方を引き請けた義陳は、体裁として整っていないかった部分を改革して順調に軌道に乗せていきます。

松島 両替商をやっていたから、その利益をうまく運用していたと考えられますか。

尾脇 当初は御用米会所貸付方を引き請けつつ、両替商もやっていたようですね。恵比須

あつたら、その土地の絵師にも直接頼むこともできますね。

尾脇 前川自身、何回か大坂に行った形跡がある。大坂の商人からの手紙があつて、この間来た時に云々というような文言もありましたし。自分で集めたかはわかりませんが、

稲吉 描いている人たちの横のつながりは、何かあつたりするんですか？

水谷 かなりあると思います。まずは流派別。円山四条派の子弟関係もありますし、合作をよくしているんです。誰かの何回忌だとか、追善のためにみんなが集まって絵を描いたり、長寿を祝って集まったりと、いろいろな機会に集まっています。もともと狩野派は御用絵師、土佐派は宮廷絵師、円山派は町絵師と、活動の場が違ったのですが、この時代、江戸の後半ぐらいいなつてくると流派間の垣根がなくなつてくるんです。この屏風の中でもおもしろいのは、円山四条派が多いのですが、そこに土佐派が入っていたりとか、狩野派が入っていたりとかするところ。様々な流派が、みな肩を並べて絵を描いているのがこの時代ならではの作品でしょう。

松島 そうした当時一流の絵師たちに描いてもらうとなると、相当な費用がかかっているのではありませんか。

尾脇 時期的には、義秀の事業の総仕上げみたいな。自分の人生でここまでできるようになったんだぞという。

稲吉 これだけの絵師を集めて描かせたの

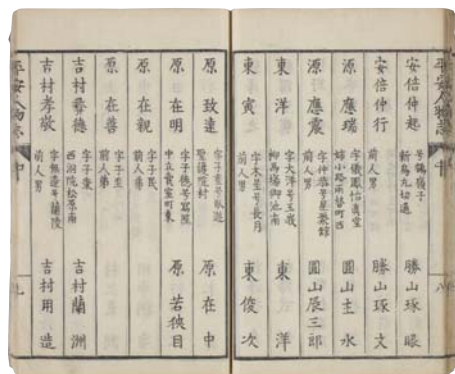
屋莊兵衛の名前

で。運用で失敗した様子はありませんし、当時は相続税もかかりませんから、屏風を作った義秀の代まで、かなりの蓄えができていたのでしょう。銀60貫をポンと渡せるなんて、普通の商人にはできません。

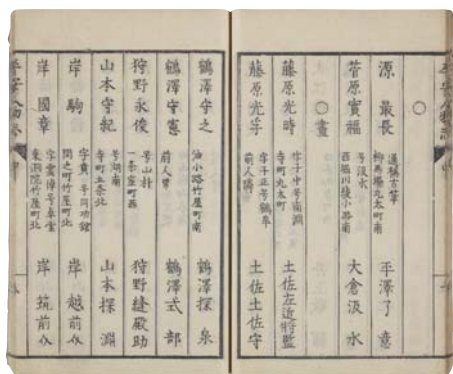
稲吉 そういった意味では、中興の祖というのはすぐく納得がいきますね。義秀が基礎を作り、その基礎の上に義陳がさらに大きくしたといえます。

36人の絵師による夢の共演

松島 義秀は自分が60歳になるまで、円山応挙をはじめ、いろんな絵師に絵を描いてもらっていますね。当時の絵師は一人一人が個々に活動していたと思いますが、これだけの絵師の作品を集められたというのは、経済力だ



『平安人物志』巻中「畫」項次葉



『平安人物志』巻中「畫」項初



『平安人物志』巻中巻頭

【平安人物志】…近世京都文化人の人名録。明和5年(1768)を初版として慶應3年(1867)まで、数年おきに増補や改訂を重ねて9版の刊行が知られている。掲載書は文化10(1913)年4回目の版、「畫」の項は巻中にあり、73人の絵師名が収録されている。

【御用絵師】…江戸時代、幕府や大名などに召し抱えられた絵師のこと。

【宮廷絵師】…土佐派は、宮廷の絵所を拠点として、大和絵(やまとえ)の伝統を継承した流派。

【町絵師】…土佐派・狩野派など、宮廷や幕府に仕えた絵師に対して、民間で絵を描くことを生業とした絵師。



は、当時の恵比須屋の成果を誇示している、表現させているような感じがします。

水谷 事業規模の話聞いて、それぐらいの大きさだったらできるだろうなと思います。おもしろいのは、屏風のかたちをしている点です。絵のひとつひとつは小さいので、こうした場合はアルバム状の画帖にするのが普通です。当時、いろんな人の絵を集めて画帖にするというのが流行っていたんです。画帖にしている個人的に楽しむのが普通の見方ですが、あえてそれを屏風にしているのは、みんなに見せたかったんでしょうね。こういうスタイルはそれほど多くはないですね。また、貼交屏風という、縦長の掛け軸くらいの大きさの絵を何枚か貼るというスタイルが主流ですので、あえて小さい絵をたくさん集めたのはあまり多くない。あまり見ない形です。

尾脇 何で銀屏風にしたんでしょうね。金じゃなくて。こういうもので銀屏風というのわりとあるのですか？

水谷 背景に金を用いた金屏風は数多くあるのですが、それに比べて銀屏風は江戸時代の最初の方にはあまりなく、後半になってくると増えてくる印象です。好みでしょうか。金ですと明らかにキラキラしていますが、銀はちよつと瀟洒な感じがします。

松島 織豊時代から江戸時代初期は『洛中洛外図屏風』のような金屏風というイメージが強いのですが、それに対して江戸時代も下ると、水谷さんが言われるように銀屏風が普

館の中に眠らせておくことは、貴重な資料の存在が周知されない可能性もあるわけです。宗教文化ミュージアムとの連携も視野に入れて検討する必要があります。

尾脇 銀屏風なので展示しているうちに酸化して黒ずんできてしまわないか心配ですね。

水谷 修復から戻って、カビなどもだいぶ取れたみたいですね。発見時もわりとキレイで驚きました。多分、それまでも必要なときだけ開けていたのではないかと。

尾脇 修復にあたった方も、銀箔はかなり質が良いもので、現代のものより厚みもあると言っていましたし、純度もかなり高いのでは。
水谷 変色しないようなコーティングが施されているかはわかりませんが、技術的に優れた方法で画面に施された銀は黒くなりにくいという話を聞いたことがあります。

稲吉 酸化しなかったのは、特別なときにだけ開いていたのでしょうか。比較的良好な状態で残っていました。

松島 義秀が亡くなって義陳になつてから、何回開いたかわからない。還暦にお披露目してから、その後ずっと仕舞っておいた可能性もありますね。
尾脇 義陳がこれを後生大事にしているような人だったら、あんなにも成功していないですよ。

松島 じつは前川家伝来の資料は、図書館に所蔵している文書や屏風のほかに、宗教文化ミュージアムに保管されている調度品もあ



及してきたということです。

稲吉 屏風の構成全体を通しての流れはあるのですか？

水谷 一応、四季にはなっているんですね。右隻の右上から、お正月っぽい飾り物、梅、桜の花見、それで夏が来てというふうに。多種多様なものが描かれていますから、前川家に来たお客さんも見たら、何かしら気になるところがある。会話のネタにはいいですよ。何かお祝いの席とかに置くんではないかと。

尾脇 屏風が仕舞われていたものの箱の側面には「寄会画銀屏風・一双・前川」と書いて

り、図書館にはこの屏風の他にも狩野秀信筆の「仙人図屏風」と、高橋機外筆の「山水図屏風」があります。狩野秀信を調べてみたら、幕府の御用絵師である狩野柳雪斎ではないかとも考えられます。今後はそれらの屏風も計画的に修復していかなければなりません。

水谷 屏風だけでなく古文書と一緒に残っていることに大きな意味があると思います。どういう来歴の屏風かわかるというのがいいですね。

松島 江戸時代後期に制作された屏風が人知れず後世に伝わってきた。それも200年の時を経て、現代に突然現れたということも不思議な縁ですが、その屏風に描かれた作品を描いた絵師^{えし}だけではなく、依頼者である前川義秀とはどんな人物で、何をしていたのかということも含めて、実に歴史の事実を知ることが重要なことだと思います。みなさんの地道な調査と研究がなければ、この屏風の制作にかかわる背景も知ることができません。前川家文書の整理と今回の屏風の発見、さらに今後も継続して調査研究を進めていただくことで、近世京都における前川家の発展が経済史の面でのような重要性を持っているのか、また近世京都画壇の絵師たちを支えていたのがどのような人々であったのかを考えるうえで、この屏風は貴重な史料といえるでしょう。もつと一般の方々にも見ていただける機会を設けることができるよう、大学として考えていく必要があると思います。

古い貼り紙があり、どういう意味だろうと思っていました。これは、寄り合つて描いたのでしょうか。それとも、寄せ集めたのでしょうか。

水谷 これは難しいところで、合作など、一つの画面に皆で描いている場合は、いかにも寄り合い描きという感じがするのですが、この屏風は一人一枚ずつですからね。手の込んだいる図もある一方で、その場で描けそうな図もあります。吉村孝敬の「鴨図」に文化13年の款記がありますが、他の作品には制作時期が記されていません。絵師のみなさんはそのときは全員ご存命なのですが、森狙仙だけ名前の漢字が違う。屏風の絵には「狙仙」とあるので、文化13年より9年以上前に制作されたことになります。

尾脇 時代的には、狙仙を除くとそんなに離れていない。10年も20年もかけて集めたというものではないでしょう。

松島 義秀が文化13年は私の還暦だから、それまでに描いてほしいと頼んでおいたものを、60歳の時に屏風にしたということも考えられますね。

貴重な史料として

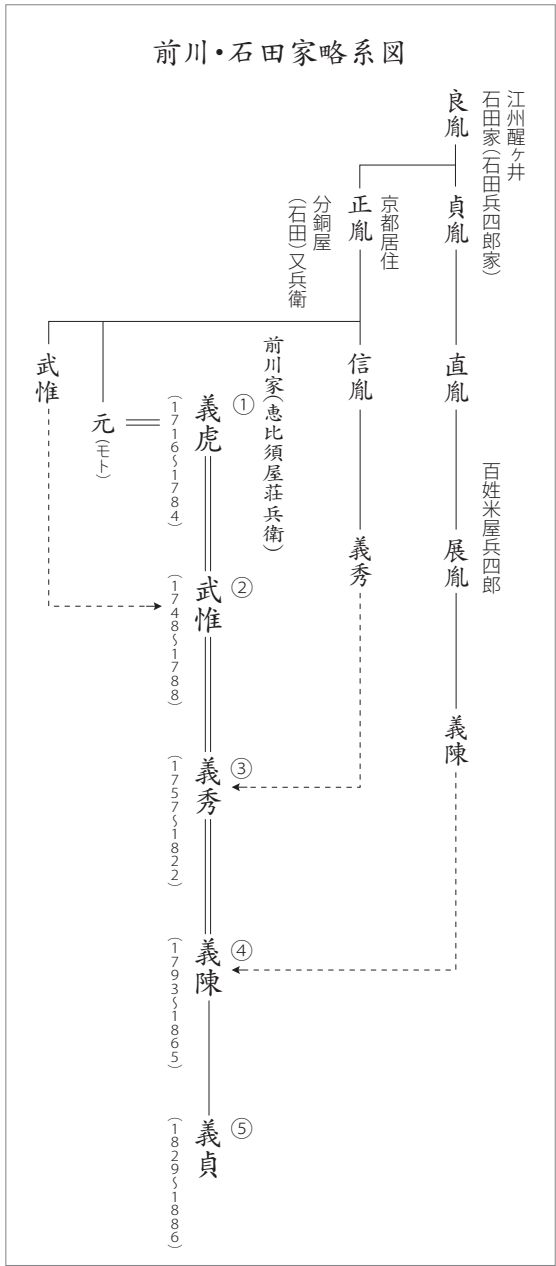
松島 図書館では現在、デジタル化したデータをコレクションとして公開していますが、この屏風を貴重な文化財として登録申請をする必要があると考えています。このまま図書



前川家(義虎、義陳)の略年譜

享保元年(1716)	義虎、近江国浅井郡川道東村(現滋賀県長浜市川道町)の百姓五郎左衛門(義光の子として生まれる)	文政5年(1822)	義秀没
延享元年(1744)	義虎、京都へ出る	文政10年(1827)	義陳、御用米会所貸付方を御用米会所より独立させ、その経営を掌握
安永5年(1776)	のちに奉公先の大宮通三条上ル町夷屋(恵比須屋)治兵衛から暖簾分けを許されて独立、恵比須屋莊兵衛の名で両替商(本錢屋)を営む	文政12年(1829)	義陳、御用米会所貸付方としては苗字御免となり、前川莊兵衛と称する
天明4年(1784)	義虎、六角油小路東入町(本能寺町)の家持となる	文政13年(1830)	義陳、前川五郎左衛門と改名する
天明8年(1788)	義虎没	天保3年(1832)	義陳、壬生村の郷土株(八木重次郎家)を買得
天明8年(1788)	武惟没	天保5年(1834)	義陳、京糸割符株を買得
寛政8年(1796)	義秀、絶家していた川道東村百姓五郎左衛門名跡を再興させる	天保6年(1835)	義陳、夷屋治兵衛へ「恵比須屋」の屋号・暖簾を返上、本家・別家の関係を解消する
文化12年(1815)	義秀、隠居する	天保7年(1836)	義陳、京糸割符年寄となる
文政4年(1821)	義陳、地下官人御香水役人の株を買得する	嘉永6年(1853)	義陳、前川五郎左衛門の名を義貞に譲り、前川莊左衛門と改名
		安政2年(1855)	義陳没
		元治2年(1865)	

『京洛三十六家 山水花鳥人物図貼交屏風』～36人の絵師たちと前川家～



参考文献

京都市『京都の歴史』6 伝統の定着(昭和48年)
林屋辰三郎「化政文化の歴史的位置」同編『化政文化の研究』(昭和51年)
林屋辰三郎「近世絵画と京都」京都国立博物館『近世日本の絵画―京都画派の活躍』(昭和59年)
京都文化博物館「京の絵師は百花繚乱―『平安人物志』にみる江戸時代の京都画壇』(平成10年)
水谷亜希「京洛三十六家山水花鳥人物図貼交屏風」佛教大学附属図書館蔵「京都国立博物館 学叢」第36号(平成26年)
尾脇秀和「幕末期京糸割符の動向とその終焉―「糸割符」の身分格式と特権―」『日本史研究』第599号(平成24年)
尾脇秀和「近世禁裏御香水役人の実態―地下官人の職務・相続・身分格式―」『古文書研究』第75号(平成25年)
稲吉昭彦「近世後期京都における御用米会所貸付方の独立と恵比須屋莊兵衛」佛教大学総合研究所紀要別冊「洛中周辺地域の歴史の変容に関する総合的研究」(平成25年)

図書館専門員 古川千佳

新収資料紹介

『京童』『山城四季物語』『山城名勝志』『都商職街風聞』『花洛名所獨案内記』

はじめに

本学図書館では単行図書や継続図書といった通常の図書館資料のほかに、特定のテーマに沿った収集を行なっている。そのテーマとは、建学の理念にかかる法然浄土教学を中心とした仏教学、京都学ならびに近世の庶民に関するものなどである。本誌前号では浄土宗関係資料の中から新収資料として『授菩薩戒儀』が紹介されたが、今号では昨年度から今年度はじめにかけて収集した京都関連の資料五点『京童』『山城四季物語』『山城名勝志』『都商職街風聞』『花洛名所獨案内記』を紹介する。

ここに紹介する五点の資料はいずれも版本(印刷本)である。天下の孤本というわけでもなく、また本学だけが所蔵しているというわけでもない。ただ近代印刷の図書と異なり、印刷本だからといってそれら諸本がすべて同一とはかぎらないのが古典籍である。同じ版本を用いても、一冊一冊手作りされていた前近代の図書は、それぞれ表情を変えて出来上がっている。紹介にあたっては、本来ならばそれら諸本の伝存および異版、同版等を含む全般の状況、諸本における本学所蔵資料の位置についても記さなければ

ばならないのであるが、紙幅と時間にかぎりがあるため、詳細は次の機会を待たねばならない。よって、本稿における前置きのない説明は諸本一般についてではなく、本学所蔵本についての言及であることを断っておきたい。

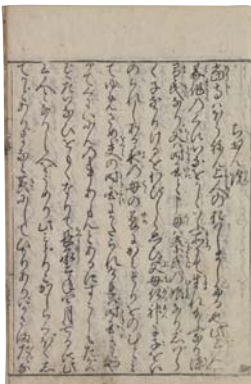
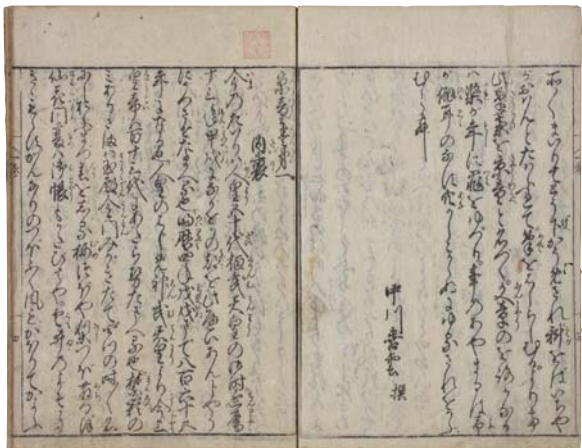
『京童』

仮名草子とも京都地誌ともいわれる本書の書名「京童」については自序に命名の由来を掲げている。「せめて古郷のつとに。見ぬ京物語／ははいあらじ。仁和寺の法師のひとり岩清水に／まうでつる事のあやしく。今少年のさかしきにあ／なひさせて。九重の外まで見めぐり。鳳闕のめで／たきつくり。神社仏閣のかたちを系かき。來歴を／しるしてよといへは。杜撰のことなりといひながら／…(中略)…今黄吻／ねがはくは。詞の花をかざらず。その根を求ん。／所くまいりてとう下かうめされ。科をばいちや／がおはんとたはふれて。筆をはしらしむる。よりて／此草藁を京童と名づく」と綴り、徒然草の故事を引いて少年を先達に京の各地を巡った

と述べている。

仮名草子は一般に、仏教的な要素を多分に含む啓蒙教訓的なもの、説話集的な要素を含む中世小説的なもの、名所記、案内記に文学的記述が加えられた実用書的なものなどに大分されるが、本書は最後にあげた名所記、案内記に文学的記述が加えられた実用書的なものといえる。

巻第一、二には洛中を、巻第三以降には洛外の神社仏閣、名勝を配し、内容は縁起、由緒などが主軸となっている。巻第一は「内裏」にはじまり「泰産寺(子安)」まで、巻第二は「清水寺」から「二條の城」まで、巻第三は「北野の天神」から「草堂」まで、巻第四は「吉田」から「鳥羽の戀塚」まで、巻第五は「くらま」から「水うみ」まで、巻第六は「あたご」から「太秦」までの見出しを立て、名勝ごとにほぼ対応する挿絵が添えられている。近世京都地誌の嚆矢であるとともに、仮名草子の文体をかりて古歌を引いた本文には狂歌師でもある著者自作の狂歌、発句、長歌などを添え、その内容は、単なる名所・地名を連ねるだけにとどまらない。



〈書誌〉

書名は巻頭、目録および自序文中にも「京童」と記しているが、巻第一の巻頭と序文中にのみ平仮名で「きやうわらべ」とルビが振られている。元題簽は残っており、後補題簽は無地のままである。柱には巻次のみが刻され、序文、跋文および巻尾にも書名

はない。著者名については本文への署名はなく、自序末に「中川喜雲撰」と記されている。

著者の中川喜雲は江戸前期に京都で活動した人物である。医業の傍ら貞門の俳諧を学び、仮名草子作者としても活躍した。日本古典籍総合目録データベースおよびNACSIS-CAT総合目録データベースなどによれば『京童』明暦四、『鎌倉物語』万治二、『私可多咄』万治二、『案内者』寛文二、『京童跡追』寛文七、『女筆往来』（寛文十年書籍目録等）、『都案内者』寛文十一、『道中名所記』（天和元年書籍目録）、『奈良刀』赤手拭『道草』（上記三点は紀行群書備考による）など地誌、年中行事、咄本等の分野に著作を遺している。生没年はわかっていないが丹波出身で、名は重治、吉左衛門と通称し、山桜子と別号した。

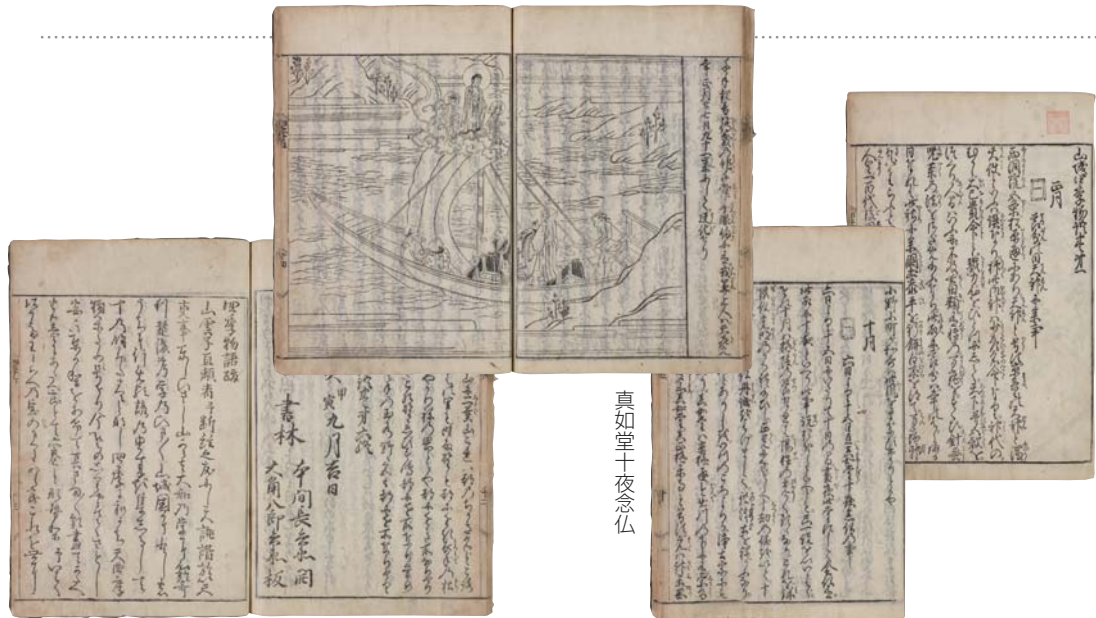
刊記は巻末の序文に続けて「明暦四戊戌年／七月吉日／平野屋作兵衛開板」と刻され、平野屋作兵衛（京都二条通観音町）から明暦四年（一六五八）の日付で刊行されている。木整版。

体裁は六巻六冊の四つ目袋綴本である。寸法は縦二五・四×横一七・三センチメートル、表紙は深緑色で雷文地に蓮華唐草文の空押しがされている。本文部分の匡郭は四周单边無界で每半葉に十一行を配した和文である。

来歴を示す情報としては「越□」ほか、「飛州／松木屋／高山」（松木屋は飛驒高山の貸本屋と思われる）の印記、「松木」の墨書があり、多くの人々に利用されたことがうかがえる。なお、巻第三に「十二 十三」の飛び丁がみられる。

現在、『京童』の版元は、本書の平野屋作兵衛のほかに八文字屋五郎兵衛、山森六兵衛が知られてい

『山城四季物語』



る。山森版にはさらに二種を確認することができるという。これらはすべて刊年表示を同じくするが、八文字屋版を初版に求版と部分・全面復刻を重ね、最後は平野屋の手にわたり、書肆名のみ入れ木で修正印行されたものとみられている。

〈構成〉

各巻目録

各冊冒頭に各二丁を配す

序文

初冊巻二目録の後に自序二丁を配す

跋文

末冊巻六の末尾に二丁半を配す

目録見出し項数

巻二十八、巻三十二、巻三十三、巻四十四、巻五十、巻六十三、計八十七

各冊最終丁付

巻二廿七、巻二卅一、巻三三、巻四廿二、巻五十九、巻六廿五 目録序跋を分けず各冊とも「二」から通番を振る

挿絵数

巻二十二、巻三十二、巻三十三、巻四十四、巻五十九、巻六十三、計九十一（オモテ・ウラ別計）

『山城四季物語』

京都の年中行事書で、自序に「大内におこなはせ給ふ。公事のおこりは。／公事根源。年中行事のふみにくはしければ。／もらしぬ。たゞ地下にとり行。神仏の御事なり。／さらに僕がおろかなる心をもて。しるすにはあらず。／其所々の。縁起并傳記舊記を

〈書誌〉

書名は題簽、巻頭、巻尾、目録、自序題には「山城四季物語」と記され、柱と跋題には「四季」「四季物語」と略記されている。著者名については本文への署名はなく、自序の署名は「坂内氏山雲子」、風鈴軒友松處士の跋文中には「山雲子直頼」と記されている。

著者の坂内直頼は京都の国学者で、確かな生没年はわからないが、正保元年（一六四四）ごろに生まれ、正徳元年（七一）ごろ没したと考えられている。直頼の著作には日本古典籍総合目録データベースおよびNACSIS-CAT総合目録データベースなどによれば『伊勢物語抄』年不明、『山城四季物語』延宝二、『書札初心抄』天和二、『歌仙金玉抄』天和三、『和歌詞林抄』天和三成立、『軽口大わらひ』延宝八、『本朝諸社一覽』貞享二、『説法用歌集諺註』元禄四、『善光寺縁起』元禄五、『九想詩諺解』元禄七、『有職袖中鈔』元禄一一、『山州名跡志』正徳元、『都歳時記』享保六、『唯信鈔註解』（享保書籍目録）、『大和詞秘注』元文三、『日本風土記』享和三年記は成立または刊年）があり、和漢文学の注釈、仏教、地誌、年中行事、有職故実といった広範な分野での著作活動と活動年代をみることができる。字は雪庭、号は山雲子・如是相、法号は白慧、また葉山之隠士とも称した。

刊記は巻末尾題のすぐ後に「延寶甲寅九月吉日／書林／本間長兵衛／大角八郎兵衛／開板」と刻され、京都二書肆の合版で延宝二年（一六七四）に刊行されている。冒頭の自序年記は同年衣更着（二月）のはじめ、末尾の俳友・風鈴軒友松處士の跋文年記は同年弥生中の十日（三月二十日）となっており、刊行日より半年ほど前に書かれていることから本文

はおおむねそれまでには成立していたと思われる。体裁はもと六巻六冊であったものが全巻二冊に合本された五つ目袋綴本である。寸法は縦二六・八×横一八・二センチメートル、表紙の表にくたびれが見られる。題簽の周囲は摩耗がすすんでいるものの四周双辺の元題簽が残り、書名ははっきりと確認できる。本文部分の匡郭は四周単辺無界で每半葉十二行を配した和文である。

巻第一の目録に「一二、本文冒頭に「三四」「五六」の飛び丁、巻第二に「又十四」、巻第三に「又十」の又丁がみられる。

伝来を知る情報としては「山田藏書」「兎角菴」の二種の印記がみられ、後者は文芸雑誌『武蔵野』（半井桃水主宰、明治二十五年三月創刊、樋口一葉らが参加）の同人・小田果園の蔵書印であり、旧蔵の来歴をうかがうことができる。

〈構成〉

序文

冒頭に三丁を配す（山雲子）

口絵

春・夏・秋・冬四画（オモテ・ウラ別）

目録

各巻冒頭に各二丁を配す

目録見出し項数

正月：六、二月：五、三月：六、四月：十、五月：四、六月：三、七月：七、八月：四、九月：七、十月：三、十一月：三、十二月：追加含む二、計六十

各巻内容配当および最終丁付

巻二：正月・二月（五・二十）、巻二：三月・四月（十九）、巻三：五月・六月（十四）、巻四：七月・八月

（十八）、巻五：九月・十月（十八）、巻六：十一月・十二月（十三）

挿絵数

巻一：八、巻二：九、巻三：十、巻四：八、巻五：六、巻六：三丁オモテ・ウラ別計四十八

跋文

末尾に二丁を配す

『山城名勝志』『山城名勝志圖』

『山城名勝志』（以下『名勝志』という）は山城国（京都府南部）の地誌で、巻二には序、總目録、引用書目、「平安城記」を冠する。本文は宮城部にはじまり、洛陽部、乙訓郡部、葛野郡部、愛宕郡部、紀伊郡部、宇治郡部、久世郡部、綴喜郡部、相樂郡部、郡末勘部と中心部から周辺部に向かって筆を進めている。凡例によれば「此編は山城國の名所古跡を舊記の文にまかせて書載せ、近代の人の説を引用するには或云と書す其所の人の説を用るには土人言と書す愚按の詞は／今案（按）と書す且皆細書して舊記御文に混ぜないように区別している。また自跋に「弱年／のむかしより今六十にするまで古跡名所／たつねてあかすたつめるよりしてき／してさかひをしるし留ところをあらは／さんとするに筆みしかく才ともし・・・」とあり、著者は若いころから六十歳を過ぎるまで山城国の名所旧跡を歩きまわり、文献調査を行なつてなした解説だという。取上げられた神社・名所旧跡は二千七百箇所余、掲出された引用書目は『舊事本紀』をはじめとして七百点以上におよぶ。本文に先立ちまだ益軒を名乗る前損

軒貝原篤信書するところの「平安城記」が付されている。

附図の『山城名勝志圖』（以下『志圖』という）には巻次が付されていないが、本体に対応する山城國總圖、大内之圖、八省院・豐樂院圖、東西兩京圖、乙訓郡圖、葛野郡圖、愛宕郡圖、紀伊郡圖、宇治郡圖、久世郡圖、綴喜郡圖、相樂郡圖の地図十二鋪を収める。またこれら附図のあることは本体の『名勝志』総目録に「○○ノ圖別二附ス」と記している。八郡部は同名で対応するが、宮城部および洛陽部には山城國總圖、大内之圖、八省院・豐樂院圖、東西兩京圖が対応している。

前掲の『山城四季物語』の著者坂内直頼が元禄十五年に白慧の法号で著した地誌『山州名跡志』が奇しくも同正徳元年に公刊されている。こちらの収録範囲も『名勝志』とほぼ同じく山城八郡と洛陽部（殿舎ノ部、大内裏之部、寺院、神社）が二十二巻にわたつて解説されているが、八郡部をさきに配している。



『山城名勝志圖』
山城國總圖

〈書誌〉

書名は題簽・巻頭・巻尾・目録・序は「山城名勝志」、柱は「山州名勝志」と記されている。著者名は巻一、十三・二十一巻頭下部に「散位正六位上源朝臣武好輯編」と記され、村田通信の序文中には「左馬少允源武好」、貝原篤信の序文中には「大島武好」と記されている。末冊末尾の自跋に署名はないが、文中に「武好」と小書きして自著であることを示している。

編者の大島武好は『新修京都叢書』解題によれば通称を求馬といい、若年より官家に奉仕し宝永七年（一七一〇）七十歳で没している。貝原篤信は宝永二年筑前から寄せる序文で、自身の京都遊学中に武好と親交のあったことを記し、「・・・武好姓源往歳／甲申季冬念六日任左馬少允益因／自古代嘗有預于 公職也觀其所／著之山城名勝志其為書也・・・」とその功績をたたえている。村田通信もまたその序で「左馬少允源武好博覧和記廣知故実」と記し、博覧強記の知識人と評している。公家に入っていることで、武好は多くの書物に接する機会を得ていたことがうかがえる。日本古典籍総合目録データベースおよびNACSIS-CAT総合目録データベースなどでは『名勝志』以外の著作は確認できないが、その理由は、本書の編纂が膨大な調査を要するもので、その考証にも長い時間のかかる一大事業といつても過言でないようなものであったからかもしれない。

刊記は末冊後見返しに「正徳元季卯年初秋日／洛陽宣風坊書林／兒玉九郎右衛門／井上忠兵衛／梅村彌右衛門／田中庄兵衛／西川丹五郎／古川三郎兵衛／北村四郎兵衛／林正五郎／新井彌兵衛／藏版」と刻され、正徳元年（一七一一）、九名の書肆の共板で刊行されている。木整版。洛陽とは、中

国の東都の呼称に倣つて平安京でも使われた呼称で、東の京すなわち左京のことであつたが、右京の衰退にともない京全体をさす異称となつた。宣風坊とはこれまた中国の都城制になつた平安京の条坊区画のひとつの名で、朱雀大路を中心にした左京の四条大路と五条大路に囲まれた地域である。右記の書林はいずれもその区域に店を構え、その多くが寺町五条あたりに集中し、合版には好都合であつたと思われる。「洛陽宣風坊」には、都の地誌という内容に相応するような出版地の表現をみることができ。村田通信の序文日付は「寶永乙酉上巳日」(宝永二年三月三日)、貝原篤信の序文日付も「寶永乙酉春分日」となっており、序文成立から六年余を経ての公刊となつたことがうかがえる。

体裁は、『名勝志』は四つ目袋綴本、『志圖』は表紙付きの疊物である。『名勝志』の寸法は概ね縦二六・二×横一八・七センチメートル、地図を折り疊んだ『志圖』の表紙は概ね縦二〇・〇×横二五・九センチメートル(以下単位同じ)、各図の寸法は以下のとおりである。山城國總圖：四五・八×五八・七、大内之圖：三二・三×四六・二、八省院・豐樂院圖：五九・〇×四六・五、東西兩京圖：五八・五×七〇・九、乙訓郡圖：三一・三×四三・二、葛野郡圖：三〇・九×六九・〇、愛宕郡圖：三〇・八×七八・六、紀伊郡圖：四六・五×四七・三、宇治郡圖：三一・四×横六三・〇、久世郡圖：三〇・五×四七・〇、綴喜郡圖：四六・二×五九・二、相樂郡圖：三〇・九×七〇・三。本志、附図とも縹色表紙に四周双边の元題簽が残り、書名の下部に収録郡部名または図名、『名勝志』ではさらに冊次序次が刻される。『名勝志』の本文部分の匡郭は四周单边無界で每半葉十一行(注双行)を配し

七目録(一)本文三(八十四(乱丁および重複紙有)、十八(久世郡部)・卷十八目録(一)本文三(六十三、十九(綴喜郡部)・卷十九目録(一)本文二(六十三、二十(相樂郡部)・卷二十目録(一)本文二(三十四、二十一(郡末勘部)・卷二十一目録(一)本文三(二十五跋文(一)二見返し刊記三大尾

『都商職街風聞』

江戸期文久年間における京都市中の職業名鑑といふべきもので、各種職業の店や職人の住所と名を列挙している。排列はいろは順とその最後に「京」を加えた見出し字のもとに行われるが、「お」の項が「を」お字位置の二か所に分散している。序に「けにやみやこ繁昌に／工商その業を我逸と／はけむその中に人の／口もて言はやすを／ひろひ集めて遠國／よりうぬ登りの君子もの／求め玉ふ便とすれば洩た／こともさはなるへしと示云」と記されているとおり、諸国から訪れる人々の買い物などの便として、袂や懷に入れられるくらいの小さな作りになっている。巻末の板元「御断書」に「一次第ふ同之義御免可被下候／一市中多分之義二付若相洩候／御方様且は間違等在之候は、／板元へ御しらせ可被下候」とある。同種の職に多数の店や職人がいるのであれば、割愛した部分もあつたものと思われる。

本書の見出しをたどると古都ならではの店やめづらしい職業名であふれている。最後に立項された「京」には京都三職「御冠師」「烏帽子折」「御末広師」が挙げられている。内裏をかかえる京ならではの職業である。一方で「と」の見出しには、「銅人形師」というものがある。「人形」のつく「人形問屋」「生人形系

ている。巻二に「ノ四」の飛び丁、巻十四に「又十五」の又丁があり、巻五の目録最終丁と本文初丁の丁付はともに「三」で重複している。巻七の第四十二丁が欠落し、巻十七の第十三丁は八重落ではないが、同一丁が重複している。巻十五の第三十六丁と巻十七の第七十丁には乱丁がみられ、巻八／十の最終丁にそれぞれ次冊の先頭に綴じられるべき各巻目録の初丁が、巻十一上、十二上の最終丁にはそれぞれ下冊の先頭に綴じられるべき初丁が綴じられている。『志圖』は十二図とも無匡郭の墨摺地図で、内題題字にも匡郭はない。

来歴を示す情報としては、『名勝志』の初冊表紙に「仁百卅九番／全三十冊」と墨書された蔵書票があり、初冊冒頭に「書林／丸米」、各冊初丁に「廣中氏所／紅梅書屋／藏之印章」「神谷藏書」、各冊最終丁に「竹俣」の印記がある。『志圖』の各表紙には「行」の墨書貼紙が、初図(總圖)表紙にはさらに墨書・總圖。大内之圖。八省院・豐樂院／東西兩京圖。山城八郡／合計拾式枚全部の中に朱書「行印／合本十五冊也」の交じる貼紙がある。

〈構成〉

地誌『名勝志』二十一巻三十冊に地図『志圖』十二冊を附図とする。

序文

『名勝志』巻一冒頭に村田通信、貝原篤信を配す「平安城記」(貝原篤信著)

序文に続いて配す

総目録・凡例・引用書目

「平安城記」について二丁、二丁、十二丁を配す

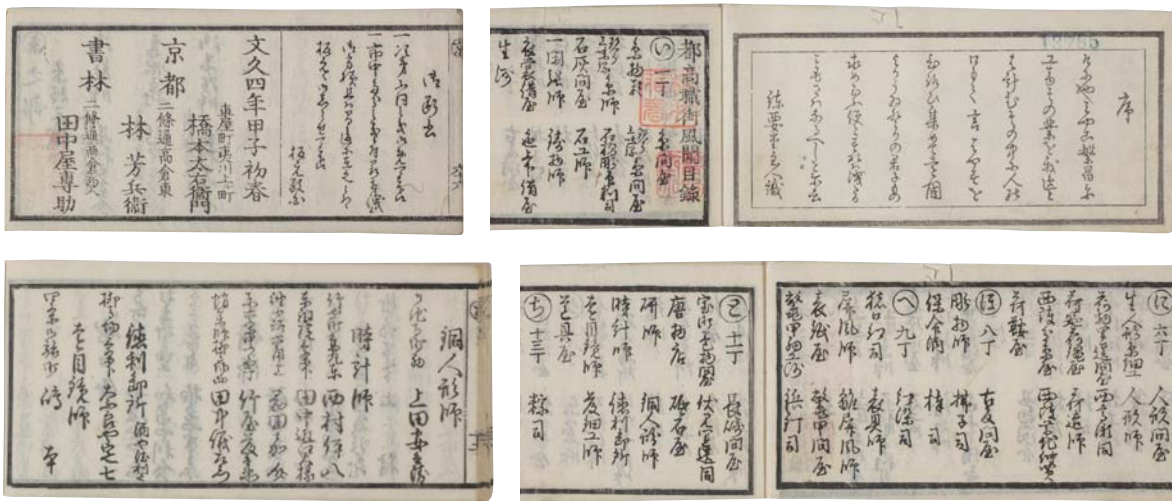
細工「人形師」は「に」の項に入っているのであるが、「銅人形師」は「に」ではなく「と」の項に入っている。玩具や美術品としての人形ではないことがうかがえ、別の範疇にいれられることを示している。銅人形とは銅製の医学用解剖人形、人体型張子のようなもので、人体内部の血管や内臓の様子が見えるように作られている。銅人形は中国宋代の医学で、経絡や鍼灸を学ぶために作られたことに、その歴史を遡るといふ。日本へも輸入され、我が国でも東洋医学を学ぶために製作されるようになり、やがて西洋医学も学ばれるようになった江戸後期には「銅人形師」という職業が成り立つまでになったようである。レイアウトでは「薬」の項に特徴がみられる。ここでは薬品名が冒頭に出されており、紙幅の割き方も群をぬいており、京土産としての需要の高さをうかがうことができる。

『都商職街風聞』



各冊内容配当および丁付

一 村田序(一)三貝原序(一)四、五(飛丁有) 平安城記(七)十二総目録・凡例・引用書目十三(二十六終) 巻二(宮城部)目録(一)本文三(三十六、二上(洛陽部)・卷三目録(一)本文三(三十三、二下(洛陽部)・卷二本文三十四(六十一、三上(洛陽部)・卷三目録(一)三本文四(四十、一、三下(洛陽部)・卷三本文四十二(八十、四(洛陽部五)・卷四目録(一)二本文三(六十二、五上(洛陽部)・卷五目録(一)三本文三(三十二、五下(洛陽部七)・卷五本文三十三(六十八、六上(乙訓郡部)・卷六目録(一)二本文三(四十三、六下(乙訓郡部)・卷六本文四十四(六十二、七(葛野郡部)・卷七目録(一)二本文三(五十(第四十一欠、八上(葛野郡部)・卷八目録(一)二本文三(三十五、八下(葛野郡部)・卷八本文三十六(六十七) 巻九目録(一)九上(葛野郡部四)・巻九目録(一)二本文三(三十五、九下(葛野郡部五)・巻九本文三十六(八十一) 巻十目録(一)十(葛野郡部)・巻十目録(一)二本文三(四十四) 巻十一目録(一)十一上(愛宕郡部)・巻十一目録(一)二本文三(三十六、十二下(愛宕郡部)・巻十二本文三(三十七、六十五、十二上(愛宕郡部三)・巻十二目録(一)二本文三(二十九、十二下(愛宕郡部四)・巻十二本文三(五十六、十三上(愛宕郡部五)・巻十三目録(一)二本文三(四十、十三下(愛宕郡部六)・巻十三本文四十一(七十九、十四(愛宕郡部七)・巻十四目録(一)二本文三(六十二(又丁有)、十五(愛宕郡部八)・巻十五目録(一)三本文四(八十二(乱丁有)、十六(紀伊郡部)・巻十六目録(一)二本文三(八十四(又丁有)、十七(宇治郡部)・巻十



〈書誌〉

書名は表紙左肩に題簽風の双辺郭を伴つて「花洛商職ちまたの風聞」（「花洛商職」は角書）と直刷りし、目録および巻頭には「都商職街風聞」と記す。柱、巻尾、序には記していない。編者名については本文への署名はなく、冒頭見返しに配される序文に「練要堂主人識」と記すのみである。

刊記は最終丁ウラに「文久四年甲子初春／京都書林／車屋町夷川上ル町／橋本太右衛門／二條通高倉東／林芳兵衛／二條通高倉西入／田中屋専助」と刻され、田中屋専助名には「皇都二條通／高倉西嶋林／崎轉堂藏□」（最終字印影薄く読取れず）の蔵版印が添えられている。冒頭の自序には年記がなく、文久四年（一八六四）に京都の書肆、橋本太右衛門・林芳兵衛・田中屋専助の三名によって出版されている。木整版。

体裁は三ツ目袋綴の横長懷中本である。寸法は縦七・三×横一五・九センチメートル、表紙は、表に三条大橋を渡る大名行列、裏には流水上に舞う千鳥の姿を描いた色刷りで、一見縮緬本の表紙を思わせる。匡郭は四周単辺、本文部の丁付「二」「三」「五十」「五十一」は同じ紙が二枚ずつあり、重複している。伝来を示す情報としては「松井／藏書」「碧雲齋」の蔵書印記がみられる。

〈構成〉

序文

前見返しに配す（練要堂主人識）

目録

冒頭に六丁を配す

刊記

現在も擬宝珠や橋脚の一部にその跡を残す伝統的な建造物である三条大橋にはじまり、硝子燈を立てた鉄造りの近代建造物となった四条大橋を配して締めくくり、近世から近代への移ろいを暗示しているようにもみえる。

〈書誌〉

書名は表紙左側の花枠題簽と前見返し、袋中央に「花洛名所獨案内記」と刷られ、本文の巻頭、柱、巻尾には記されていない。

『花洛名所獨案内記』



最終丁ウラ「御断書」の後に配す
目録見出し項数

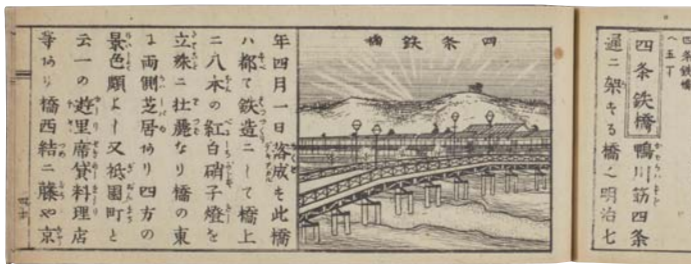
い・十二、は・十九、に・十、ほ・五、へ・九、と・十二、ち・十一、り・五、ぬ・六、お（本来は「を」のころ）・二、わ・五、か・二十九、よ・二、た・十、そ・四、つ・四、ね・二、な・一、ら・三、む・二、う・四、の・四、お・一、く・四、や・十一、ま・五、け・五、ふ・十九、こ・十三、て・五、あ・十、さ・六、き・十二、ゆ・六、め・二、み・五、し・十五、系・四、ひ・七、も・五、せ・五、す・十二、京・二、計三百十三となり、「る」る「れ」「ぬ」「え」は項立てせず

丁付

目録二・六、本文二・六十六（末尾の御断書および刊記を含む）

『花洛名所獨案内記』

本書は明治二十四年の、川勝徳次郎による再版本であるが、その奥付によれば初版は明治十三年（一八八〇）七月に出版されている。京都で道法を記す場合に京都の入口三条大橋を起点とする点や名所の大半が寺社仏閣であることなど、江戸時代からの名所案内記を踏襲するものではあるが、明治の文明開化によって新しくできた建物や組織が多く含まれており、新しい価値観にもとづいた文章に特徴をみることができ、本書の見出しの一番に挙げられているのは「新京極」である。東京遷都後の京都復興政策として植村正直京都府参事等の計画によって再開発された特記すべき場所とはいえ、歓楽街が内裏よりさきに配されるというのは江戸時代までならばおそらく考えられなかったことであろう。新



著作者名については後見返しに「京都市下京区寺町通綾小路下ル中ノ町／著作印刷兼発行者川勝徳次郎」、袋の書名脇には「川勝徳次郎編輯」と記す。刊記は後見返しに「明治十三年七月 出版御届／同年同月 彫成發兌／明治廿四年十一月 再版」と刻され、袋には「明治十三年七月 出版」「明治廿四年十一月 再版」「鴻宝堂藏」と刻されている。川勝徳次郎は本書奥付刊記に示されるとおり京都の書肆で、堂号を鴻宝堂という。元禄半は過ぎにはすでに出版活動を行なっていたことが知られるが、明治になつてからは銅版も多く手掛けている。本書も銅版。体裁は三ツ目袋綴の横長、寸法は縦五・三×横一

しい時代に後押しされた京都再興の気運が伝わってくる。本文では目録の道法起点となっている三条大橋が半丁全面ちかくをしめる挿絵とともに最初に配され、以下新京極、御所と続く。見出しを追う中、次に目に入るのは明治時代になつてはじめて登場する名所、施設等である。見出し項数としては依然として全体の八割を超えている近世以前からの寺社仏閣に、建勲神社など明治期に創建・再興された寺社が加えられ、さらに「山寄ステイション」「舎密局」「織工場」「勸業場」「中学校」「ステイション（停車場・京都駅）」など近代ならではの目新しい名が登場する。舎密（セイミ）局とは幕末から維新期におけるchemistry（↓セイミ）研究教育機関で、幕末諸藩では軍事技術向上が、明治期には殖産振興が研究の主たる目的であった。京都舎密局は開化後に近代理化学の府として明治二（一八六九）年開設された大阪舎密局の教頭を務めたハラタマクGratamaの薫陶を受けた明石博高の建議によって翌三（一八七〇）年に開設され、多くの事業振興が図られた。同八（一八七五）年には官立の京都司薬場が併置され、本書に「上京區卅一組夷川土手卑二あり諸藥品製造及藥業取締の局なり門前に分局左右二あり皆西洋造二して尤も美觀なり」とあるように、薬品製造や検査が行われた。文章表現においても近代建築、建造物が新しい名所として認識されていくところに近代の美意識をみることができ、このような傾向は新しい建造物に共通しており、とくに最後の挿絵として選ばれた旭光に輝く四条大橋では「都て鉄造二して橋上二八本の紅白硝子燈を立殊二壮麗なり」と称賛し、袋の表紙にもその光景が使われている。本書の挿絵は豊臣秀吉の命によって架けられ

二・七センチメートルと極小懷中本である。紫色地に小丸と小四角の文様を空押し艶出した色鮮やかな表紙を使用し、題簽の印字には赤インクが使われている。本文部の匡郭は四周単辺、再版本では第四十一から第四十四丁が欠落しているが、初版には存在していたのか不明。蔵版印や蔵書票等来歴を示すものはみられない。

〈構成〉

目録

冒頭に「三條大橋ヨリ諸方道法附」として二段組みの見出しの下に道法距離を記す

目録見出し項数

「新京極」より「ステイション」まで百六を数える（起点の三条大橋は含まず）

本文見出し項数

三条大橋から六波羅密寺まで百十七を数える

刊記

後見返しに奥付を配す

丁付

目録二・二、本文二・四十、ただし第二十八丁は表裏「自廿八／至三十」の頁付、四十一・四十四欠、時刻表二・四十五・四十六

おわりに

江戸時代、明治時代の京都資料としてはこのほかにも、おびただしい数の出版物を見ることができ、これらは郷土資料であると同時に、京都に立脚する本学にとって来し方行く末を考えるに重要な資料でもあることを知り、そのなかに多くのことを学ばなければならないと考える。

中国古典・思想史の世界を訪ねて

文学部中国学科教授

鵜飼光昌

鵜飼先生は、学部生時代はどのような生活を送られたのですか？

学部生時代は文学部で中国文学を専攻しました。最初は古典文学に興味がありましたので、魏晉南北朝時代を代表する詩人で田園詩人と呼ばれた陶淵明や、山水詩の祖とされる謝靈運など、多くの有名な詩文を残した作家について勉強していました。図書館もよく利用しましたね。授業がある日だけでなく休みの日も午後から出かけていつて夜遅くまでいることが多かったように思います。ただ、最近の図書館ほど館内の照明は明るくありませんでしたから、長時間書物の細かい字を追いつていくと目が痛くなることもよくありました。自転車で通学できるところにアパートを借りて、漢籍を読むために無理をして

買った諸橋轍次先生の『大漢和辞典』だけが入口に壊れかけた錠がかかっているような古い部屋の中で燦然と輝いている、そんな学生時代でした。

現在の研究分野は魏晉南北朝時代の思想史ですが、その研究を始めたきっかけを教えてください。

学部生時代に研究していた謝靈運という人は、南朝宋の有名な詩人で、貴族出身で身分も高く、山水の遊びをよくした人ですが、仏教を信仰し、当時の仏教者を非常に尊敬したり、サンスクリットを理解して、涅槃經の翻訳にも携わったりしていました。聡明で多方面の才能に恵まれた天才ですが、詩人や文学者としてだけでなく仏教にも造詣が深い人物であつたので、この分

野も学びたいという思いから、大学院では思想史へ研究領域を広げ、またその後、謝靈運と同時代の高僧で当時の中国仏教界の中心人物の一人であつた慧遠の研究も始め、中国古代の思想を中心に研究するようになりました。

学部では中国文学、そして大学院では仏教学を専攻されたわけですね。

その当時の本学の大学院には、坪井俊映先生、藤堂恭俊先生、水谷幸正先生、高橋弘次先生、福原隆善先生をはじめ、浄土学や仏教学の研究に関する著名な先生方が教鞭を執っておられましたので、私も先生方から非常に多くのことを学ばせていただきました。

また、大阪大学名誉教授で中国思想史がご専門だつた森三樹三郎先生が大

阪大学の退官を機に本学に赴任され、主に大学院において後進の指導をされていた時代でもあり、私も指導を受けるため先生の演習を受講し、輪読会などにも積極的に参加させていただきまし

た。森先生は宋の司馬光の編年体の歴史書『資治通鑑』や当時の仏教に関する論文を集めた『弘明集』を演習のテキストとして継続的に使用され、正規の授業以外にも有志のために『論語』の輪読会などを開催していただいたのですが、テキストの読みについては非常に厳密な先生でした。『文献を正確に読むことが研究の出発点というのが先生の基本的な考え方で、研究者として今の私があるのも、先生と出会い、多くの指導を受けることができたからこそです。

森三樹三郎先生の著書で思い出深いものはありますか？

森先生の『中国思想史』上・下(第三文明社、レグルス文庫)は中国学科のテキストとしても使用されていました。仏教を中国文化との連関のもとでとらえた名著です。また、魏晉南北朝の精神史に関する『六朝士大夫の精神』も先生の代表作の一つです。教鞭を執られていた大阪大学の『文学部紀要』に発表されたのですが、昭和61年に同朋舎出版よ

り改めて刊行されました。講演も非常に巧みな先生で、お亡くなりになられてからも残された講演原稿によつてたくさんの方が出版されています。

森先生からご指導を受けたという『文献を正確に理解する』ということは、なかなか大変なことですね。

漢文の場合は漢字を日本語と共有していますから、ある程度のところまで理解はできても、すべてを正確に理解するということは確かに大変なことです。森先生はとにかくテキストの読みについては厳密でしたが、たとえば「こう考えたらどうか、こんなふうに考えるべきだ」といった研究の方向に関する教えは受けたことがあります。若い柔らかな心を鋳型にはめてはならないと考えられたのでしょうか。今は、そのことをむしろ有難いと思っています。

『論語』の輪読会を通して学ばれたことはありますか？

宋の朱子が著した『論語』の注釈書を輪読会形式で読んでいただいていたのですが、森先生の卓越した読解にはただただ敬服するばかりでした。どこの国の古典もそうだろうと思うのですが、



見方、考え方、感じ方というもののは年齢や人生経験とともに変化していきます。若いときに引きつけられるものもあれば、年齢を重ねることで見えてくるものもありますね。私は学部1年生のときに六朝の文学を専門とされていた森野繁夫先生の研究室を訪ねて、「どういった本を読んだらいいですか?」と聞き出したことがあります。そのときまず最初に読むように勧められたのが吉川幸次郎先生の『論語』(中国古典選2)3朝日新聞社・昭和40年)だったのですが、18才だったその当時は、たとえば「己の欲せざる所は人に施す勿れ」といったような初めて出会う孔子の言葉に新鮮な感動を受けることはありましたが、まだ学部の1年生ということもあり、『論語』は難しいという印象の方が強く残ってしまった記憶がありますね。

若い時代にはとくに『論語』は取っつきにくいという印象があるのでしょうかね。

同じ『論語』でも注釈や日本語訳によつて印象はだいぶん変わってきます。たとえば、私は今年の通信教育課程のスクーリング授業で、倉石武四郎先生の『中国古典講話』（大修館書店・昭和49年）をテキストに使用しました。漢文を符号や送り仮名などをつけて日本語の

『論語』に関してはいろいろな日本語訳が出ていますね。

語順で訓読する方法とは異なり、倉石先生は中国の人たちと同じように中国古典を現代音で読んで頭から理解するということをされた研究者です。倉石先生には中国留学から帰国されるときに「玄界灘に訓読を捨ててきたという有名な言葉がありますが、わが国初の北京語に基づく現代中国語の辞典を出された方でもあり、旧来の訓読法を用いない革新的な教育をされた先生です。倉石先生の『口語訳論語』（筑摩叢書152・昭和45年）は、やさしいことばで語りかけるように書いておられるので、古代中国の文語体の難しい文章というイメージが取り払われますし、孔子とそのお弟子さんたちの関係がどうだったのかといったことも非常にわかりやすく書かれていますから、『論語』を初めて学ぶ人にも興味をもつて読んでもらえる一冊になっていますね。

『論語』というのは孔子が書いたものではなく、孔子の言行録ですから会話の文章ですし、いろいろな観点からいろいろな解釈ができるわけです。『論語の言葉がいかに異論を生むかという例として、たとえば、孟武伯^{もうぶく}孝^{こう}を問う。子曰^とわ

ある」と述べています。桑原先生はフランスの文学や思想を専攻しておられた先生ですから、西洋の古典と中国の古

典、ギリシャ哲学やキリスト教と儒教との比較の中で、中国語の特異性について述べられていることも興味深い点です。

「孟武伯、孝を問う。子曰く、父母は唯だ其の疾まいを之れ憂う」は、孔子が魯の高官、孟武伯の問いに答えた言葉で、この前の章と次の二つの章も「孝」についての問答になつていますが、「これは今日私たちの用語における定義を求めたものではなく、孔子もまた定義しようとしているのではない。定義という考え方が生れるのは科学技術を前提とする」と桑原先生は

『論語注疏解經』
十三種の儒教經書の注疏集成である「十三經注疏」に収録されるものの一つ。
孔子の『論語』に魏の何晏が集解し、宋の邢昺が疏(注釈)を加えたもので、「孟武伯問孝 子曰 父母唯其疾之憂」「子游問孝 子曰 今之孝者 是謂能養 至於犬馬 皆能有養 不敬何以別乎」など孝についての孟武伯や子游の問いに答えた孔子の説への注釈が展開されている。本書は崇禎10年(1637)、古虞毛氏刊。

述べられています。孔子が始祖と言われる儒教の思想の根幹をなす概念の二つに「仁」というものがありますが、この言葉も定義しようとしてもできないほど非常に多くの意味を持っています。「抽象的な単一原理の追究よりも経験的な多数の範例の積み重ねによって、世界をとらえようとするのが中国思想の特色なのである」と桑原先生はその書の中でさうと書かれておりますが、卓見だと思います。

図書館にはさまざまな種類の『論語』に関する図書が所蔵されていますから、ぜひ読み比べをしてほしいですね。

一つの観点だけで物事をとらえると一面的になりますが、いろんな文献を読み比べると、こういう見方でもできる、こういう批評もあるということがわかり、思考に広がりや柔軟性が出てきます。読みたいものを個人ですべて揃えようと思っても限度がありますから、やはり図書館を積極的に利用してほしいですね。

図書館の蔵書は人類の思索の集積です。どういう本が収蔵されているのかも端末で検索すればすぐにわかりますから、学習や研究に大いに役立てていってほしいと思います。



う かい みつ あき
鵜飼光昌
文学部中国学科 教授

1957年京都市生まれ。広島大学文学部卒業、佛教大学大学院文学研究科博士課程満期退学。主な論文に「廬山慧遠の念仏三昧について」（佛教大学総合研究所編『法然上人800年大遠忌記念 法然仏教とその可能性』、2008年3月）、「頓悟説について一道生と謝靈運一」（佛教大学中国言語文化研究会『中国言語文化研究』8号、2008年7月）、「廬山慧遠の『沙門不敬王者論』について」（『吉田富夫先生退休記念中国学論集』、汲古書院、2008年3月）などがある。

図書館とわたしの研究

社会学部公共政策学科教授

藤井透

はじめに

資本主義社会とは、どんな社会なのだろうか。経済学を研究する者にとって永遠のテーマであるが、わたしは、資本主義社会とは、失業と貧困を生み出さざるを得ないと同時に、そのことが資本主義社会の存在条件でもあると理解してきた。そこで、これらの問題に、かなり早期に対応しようとした国がイギリスであり、イギリスにこそ、今日の社会保障につながる思想や制度が見出せるのではないかと思い、大学院生のころから、研究を始めた。今からおよそ30年あまり前の話である。

それから今日に至るまで、一世紀前のイギリス社会保障の思想や制度がきわめて重要であるとみなし、とりわけ、「ナショナル・ミニマム」概念を創造したフェビアン協会のウェッブ夫妻の思想と理論に関心を持ち続けてきた。

一貫して同じテーマを追究してきたといえば、聞こえはいいかもしれないが、これは、現在に至るまで、若い頃からのテーマをまとめ切れていないという自分の怠惰をごまかすような表現でもある。にもかかわらず、これまで、研究を続けてこられたのは、在職20年余りの間に、わたしの研究に直接、間接に役に立つ資料や文献が、数多く本学図書館に

収蔵されるようになったおかげである。それらの条件を十分には活かしていけないという反省も含めて、わたしの研究が本学図書館に所蔵されている英語文献、雑誌、マイクロフィルム・フィッシュにどれほど依拠してきたかを以下、書いてみたい。

I

どのような研究テーマであつても、必ず、先行研究は存在し、これを無視して、自分の研究にオリジナリティがあると主張することはできない。日本人による研究も参照するが、わたしは、自分の

研究テーマの特質から、やはり、欧米の研究者による先行研究を重視してきた。英語の二次文献の書誌的情報は細かくなりすぎるので、ここでは割愛し、19世紀末から20世紀初頭の世紀転換期イギリスの社会保障というテーマを研究するにあたって、これまで、どのような雑誌論文や書誌的な文献を利用してきたかにまず言及してみよう。

これまで、わたしは先行研究を把握するために「Victorian Studies, History of Education」を参照してきたが、「Journal of Modern History」が近年、図書館に入り、個人的には、大変、喜んでいる。これらの雑誌が、それぞれ対象や

特徴は違うが、欧米の研究動向を把握するのに非常に重要な雑誌だからである。また、やや扱っている対象が広がるが、「Journal of Sociology, The American Journal of Economics and Sociology」が

歴史研究を包含する雑誌であるので、定期的にチェックするようにしてきた。

最新の研究動向や論点は、実は、同時代の評論のなかにすでに現れていたことが少なくない。1908年から公刊されたThe Sociological reviewが所蔵されて

いることは研究者からみて、ありがたいが、ここでは、当時の代表的な総合雑誌である「The Edinburgh review」の存在を強調しておこう(写真参照)。

本学には、同誌の第三期といわれる、1802年から1929年までの全巻が所蔵されている。同誌には、当時の主に保守系の論客がある共通のテーマに関連する文献を2、3冊から5冊程度紹介し、それに評者のコメントを加えるという、いわば「書評論文」の形式を採った文章が数多く掲載されている。

これを読めば、たとえば、当時の救貧法や社会調査、種々の社会立法の動きに対する保守系の論者の観点がよく理解できる。ただ、当時の他の総合雑誌にもみられたことだが、The Edinburgh reviewにも、多くの文章が無署名になっているという難点がある。筆者が分からなければ、その文章を自分の論文の中で、引用することにはだれもが躊躇をおぼえるだろう。ただし、筆者名は次の書誌的文献で明確にできる。

残念ながら、本学には所蔵されていないが、W.E.Houghton, ed. The Wellesley Index to Victorian Periodicals. 5vol. 1966-1989がそれである(これは、オンライン版もある)。ともあれ、本学に赴任したのちに、The Edinburgh reviewが入ったことは、わたしにとって、大変、幸運で

あつた。

J・S・ミルのように筆者がきわめて著名な人物であれば、かれらの経歴を知ることとは比較的、簡単である。しかし、同時代の論者の中には、名前を知ただけでは、当人の経歴や業績を即座に思い浮かべることが困難な人物も少なからずいる。このような場合には、次の新旧のNational Biographyが役に立つ。The Dictionary of National Biography, 33v. 1917-1990. Oxford dictionary of National Biography, 61v. 2004. がそれである。コンパクトに書かれた個人の評伝は、なじみのなかった人物を短時間で知るのにきわめて有効である。わたしの研究テーマに即していえば、ウェッブ夫妻やW・H・ベヴァリッジのような著名な人物でも、新旧のNational Biographyの評伝を読み比べることで勉強になる。両者を比較することで、研究史の動向や評価の変遷が読みとれるからである。

研究を始めた頃には、指導教員から先行研究を学ぶよう、うるさく指導された。これは教員としては、ただししい指導であつた。しかし、わたしは、先行研究ばかり読んでいても、研究が前進するのにかという不安があつた。そして、素材、すなわち文献や資料を直接、扱うようになって研究の「視界」が広がっていった記憶がある。次節では、わたしの研究に

とつて、本学にどんな貴重な素材が所蔵されているのかをみてみたい。

II

ウェッブ夫妻を研究しようと思えば、かれらの手書き文書を含めた膨大なコレクションにアクセスすることが研究者としては求められているよう。そのコレクションは、かれらが創設したロンドン政治経済学院(LSE)図書館に所蔵されている。

理想はLSE図書館を日常的に利用することであるが、ほとんどの日本人研究者と同様、わたしにもそのような条件はない。ところが、本学には、意外なほどフェビアン、ウェッブ研究の条件がそろっている。

1884年に創設されたフェビアン協會は、イギリス社会主義者の知識人集団として、知られている。ウェッブ夫妻は同協会の創設者ではなかったものの、もともと古くからの会員であり、長きにわたつて、同協会の理論的な指導者と目されてきた。とりわけ、社会保障の分野で、ウェッブ夫妻およびフェビアン協會が注目されたのは、戦後イギリス福祉国家の創設にかれらが理論的、思想的に大きな影響を与えたとみなされてきたからである。





そのフェビアン協会の長い歴史を知るためには、同協会が発行してきた年報や報告書を読むことが基本の作業となる。本学には、*Annual report on the work of the Fabian Society*が、1890年から1969年まで備えられている。さらに、*New Fabian Research Bureau Quarterly*が1936年から1948年まで収蔵されている。これらの文献を利用すれば、改良主義的なフェビアン協会の特徴を長期にわたって把握することが可能となる。

1880年代は、イギリスにおいて「社会主義の復活」と言われた時期であり、フェビアン協会はもとより、マルクス主義、アナーキズム、社会民主主義を標榜する多様な社会主義組織が誕生した時期であった。そして、わたしたちの一般的なイメージとは異なり、当時の社会主義者が、ひとりで複数の組織に同時に所属することは決して珍しいことではなかった。

これは、ウェブ夫妻の思想や理論を研究しようと思えば、狭義のフェビアン協会に関連する雑誌だけを参照すれば済む、ということにはならないことを意味する。かれらは同協会との関連があまり知られていない雑誌にも、執筆したことがあるからである。ウェブ夫妻の完璧な文献目録がまだ作成されてい

ない(もちろん、LSEにおいても、である!)現状では、ひろく当時の雑誌を渉猟する必要がある。

ところが、このような困難な作業が、本学にいながらにして相当部分、行えることを御存知だろうか。それは、1880年代から第一次大戦あたりまでのイギリスの社会主義、社会民主主義、労働関係の多様な雑誌が、マイクロフィルムになっており、それが本学に収蔵されているからである。わたしが数えた限り、雑誌の数は17にも及ぶが、そのなかからフェビアン協会およびシドニー・ウェブに関連する興味深い雑誌を一例だけ、取り上げてみよう(写真参照)。

III

本学には、社会主義者によつて当時、編集されていた*To-day*という雑誌が、1883年から1889年まで収蔵されている。同誌の誌面上では、1884年から89年にかけて、フェビアン協会におけるウェブの盟友であった劇作家のG・バーナード・ショーが、ジェボンズ派の経済学者であるRev・P・H・ウィックスティードとの間で、マルクスの『資本論』の主に価値論に関する激しい論争を展開していた。

この論争は、当初、マルクスを擁護していたショーが、ウィックスティードの影響を受け、ジェボンズ理論に宗旨替えをしたと、のちにショー自身が告白した論争であった。フェビアン経済学とは何かという非常に重要なテーマを解き明かすヒントになる論争が、幸いにも、本学にいながらにして、原資料でたしかめられるというわけである。

このほかにもマイクロフィルムのなかには、作家で芸術家でもあったW・モリスが資金面でも思想面でも支えた*Commonweal*、当時きわめて著名であった女性活動家であるA・ベサントが編集を行っていた*Our corner*など、重要な雑誌が収蔵されている。これらのマイクロフィルムはわたしの赴任以前に、収蔵されていたと思われるが、ともあれ、世紀転換期イギリスの時代思潮を知ろうえでも、きわめて価値のある雑誌群であると言えよう。

ウェブ研究の必読書として、夫人であるビアトリスのふたつの自伝、*My Apprenticeship*, 1926, *Our Partnership*, 1948, をあげることができ。そして、自伝の記述の基になったのが、彼女の日記であった。この日記も4巻本として公開されているが、もともとの日記が、忠実に、書物として再現されているかといえ、必ずしもそうではない。

ところが、そのもともとの日記が

*Diary of Beatrice Webb*の名称で、マイクロフィッシュとして図書館に収められている。この資料については、わたし自身はまだ十分に利用しているわけではないが、関連して、収蔵されたと思われる、*Archive Arrangement Routledge Associates, Index to the diary of Beatrice Webb, 1873-1943*、と併せて利用することによって、今後思想的なウェブ研究をさらに深めることを、期したい。

世紀転換期のウェブ夫妻の社会保障構想といえ、かれらによつて執筆された、1909年王立救貧法委員会少数派報告を落とすわけにはいかないであろう。同報告書は、同時代ではもちろんのこと、イギリス福祉国家の節目であ

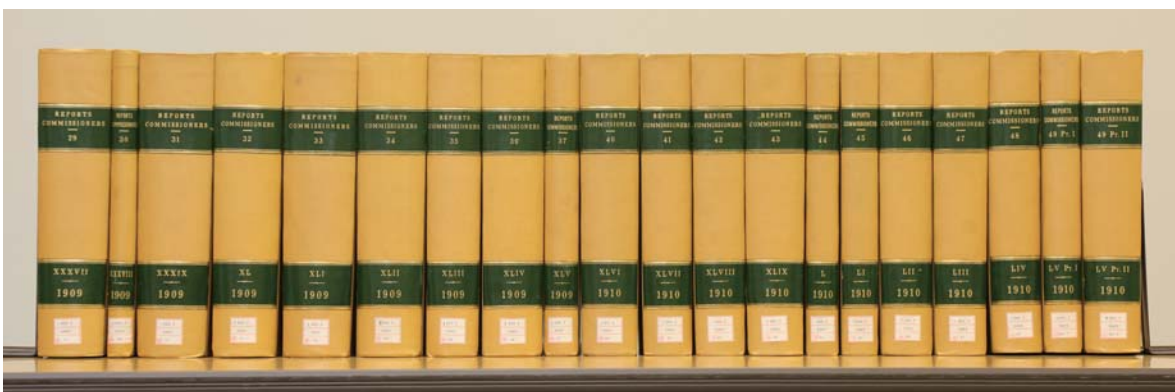
けの研究成果を出してきたとはいえないが、今後は、依拠できる基本資料が学内に数多く所蔵されているという強みをフルに利用して、研究に活かしていければと思う。

むすびに代えて

小論の依頼があつた時に、自分の研究と本学図書館との関係がすぐに頭に浮かんだわけではなかった。これは、大学院生以降、とりわけ、はじめてイギリスを訪れた1987年以降、LSE図書館などで、資料を探してきた経験から、自分の資料は自分でみつけてきたという自負があつたからだと思われる。しかし、しばらく考えていくうちに、うえで挙げた文献以外でも、電子ジャーナルや他大学図書館への紹介・利用などで、本学の図書館を活用して、研究を進めてきた事実が気づくようになった。つま

り、大学の図書館が自分にとって「空気」のような存在であるという点に、当初、思い至らなかつたのである。

今回、図書館と自分の研究の関係を考える機会を与えられ、自分の研究が驚くほど多くのものを図書館に負っていたことを発見した。すべての研究者は自分が日々、利用する文献や資料が所属する大学図書館に数多く存在し、かつ、充実することを願っている。わたしも、本学の図書館が社会科学、社会保障の文献や資料を系統的に収集し、当該分野の教育、研究の核になることを期待している。そうなれば、わたしの研究の完結に大きな弾みになると思うからであるが、それだけではない。これからの本学の発展は、社会科学の分野の充実によつてたしかないとされるし、それを強力に支える大学図書館の存在こそ、つよく求められていると、確信しているからである。



る1940年代、そして1980年代にいたつても、繰り返し議論の的になった、イギリス社会保障史研究における最重要文献のひとつである。ところが、一方の多数派報告書と併せると、1,200頁を超える長大な報告書であるために、有名な割にはきちんと読まれてこなかつた文書ではなかつたかと思われる。このような最重要文献である両報告書のみならず、王立救貧法委員会の議会資料1909 *Royal Commission on the Poor Laws and relief of Distress* が全54冊、20巻にまとめられて本学に収蔵されている事実を知る人は決して多くはないだろう(写真参照)。

そこには、同委員会における膨大な証言、独自に行われた各種調査結果もすべて網羅されている。よつて、これらを読めば、同時に進行していた「自由党の諸改革」(1906-1914年)を含めた世紀転換期イギリス社会保障の動向を、すべて把握できると言つても過言ではあるまい。

もちろん、これまで挙げてきた文献や資料のみで、わたしの研究のための素材がすべてカバーされるわけではない。しかしあらためて振り返ってみると、個人研究と言いつながら、いかに多くのサポートを得て、わたしが研究をやつてきたかがわかる。そのサポートに応えられるだ



藤井 透
社会学部公共政策学科 教授
京都市大学大学院経済学研究科博士課程満期退学、ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン客員研究員(2005年~2006年)。主な著書・論文に『エドウィン・チャドウィッカー福祉国家の開拓者―』(ナカニシヤ出版、2002年、共訳)、『「1907年原則」とは何か―1909年王立救貧法委員会少数派報告の原点(1)(2)―』(佛教大学『社会学部論集』第46、47号、2008年)などがある。

佛教大学附属図書館の事業活動報告

2013～2014年度前半期

2013年度

5月	図書館1階カウンター内に高速カラーブックスキャナー(Bookshot3600)を設置。
6月	図書館3階、4階に書架増設。
8月	図書館利用説明会開催。(2014年1月)
10月	図書館3階に講談社文芸文庫コーナーを、同じく4階に軽読書コーナーLynzo倶楽部を設置。
3月	図書館報『常照』第60号を発行。
	平成25年度私立大学等研究設備整備費等補助金により、図書館2階、3階、4階に書架増設。
	平成25年度私立大学等研究設備整備費等補助金により、『京童』『山城四季物語』『山城名勝志』『山城名勝志図』を購入(補助金交付決定)。

特集コーナーテーマ(2013年4月～2014年3月)

4月	古代ギリシアの歴史と文化
5月	日本中世の文学
6月	李白と杜甫―中国唐代の詩人たち―
7月	ヘミングウェイ、フィッツジェラルドとその時代―失われた世代の作家たち―
8月	幻想と怪奇な世界
9月	史伝文学の醍醐味
10月	スペイン―その光と影―
11月	落語を愉しむ
12月	秘すれば花なり―観阿弥680年・世阿弥650年の時空―
1月	法然上人とその時代
2月	戦国乱世の英雄たち―その実像と虚像を探る―
3月	世界のミステリとSFの名作

2014年度

5月	図書館ポータルサイト説明会開催。(2015年1月)
7月	古典籍利用講座開催。
9月	図書館2階に職員研修用図書コーナーおよび朝日選書コーナーを設置。
	佛教大学教育後援会の援助金により、朝日選書を整備。
特集コーナーテーマ(2014年4月～9月)	
4月～5月	イタリア―その歴史と文化―
5月～6月	江戸時代の思想家たち
7月	シェイクスピア―作品とその時代―
8月	西行と定家―乱世を生きた歌人―
9月	古代日本の宗教事情

特集コーナーの展示図書については、佛教大学ホームページの図書館のイベント欄からアクセスして一覧を確認することができます。



2階 朝日選書コーナー



2階 職員研修用図書コーナー

佛教大学附属図書館の沿革と「成徳常照館」の由来

佛教大学附属図書館は、佛教大学の前身佛教専門学校があった京都市左京区鹿ヶ谷の地から、現在の京都市北区紫野に移転した1934(昭和9)年11月23日に木造2階建の閲覧室と、鉄筋コンクリート3階建の書庫を竣工しました。この図書館建設にあたっては、佛教専門学校初代校長である土川善激師(浄土宗大本山知恩寺68世住職)に深く帰依された篤志家上村常治郎氏のご遺族から多額の寄付をいただき、完成することができました。その後、1963(昭和38)年9月に開学50周年を記念して閲覧室、書庫などが増築され、1972(昭和47)年4月には、開学60周年記念事業として地上5階地下1階建て、研究室を配置した複合図書館棟が完成しました。現在の図書館は、開学80周年の記念事業として、同窓会、鷹陵同窓会などの卒業生、在学生ならび保護者、浄土宗寺院をはじめとした、本学有縁の方々からの多大な寄付によって、1995(平成7)年1月に着工し、1997(平成9)年4月に竣工したものです。地上5階地下2階建て100万冊を収蔵することができます。

佛教大学附属図書館の建物は、「佛教専門学校附属図書館成徳常照館之記」にある「今ココニ冠スル所ノ成徳常照館ノ名稱ハ(中略)緋書ノ士専ラ徳器ノ成就ニ努メテ智光ヲ常照スル」から「成徳常照館」と名づけられ、書物をひもとく者が努力して立派な人格

者となり、智慧の光をいつも照らすようにという願いが込められています。この本額は佛教専門学校第7代校長江藤激英師(浄土宗大本山善導寺61世住職)によって撰述されたもので、現在は図書館1階に掲げられています。また、同じく1階に設置されている浄土宗総本山知恩院にある八角形の経蔵「転輪蔵(略して輪蔵)」の縮小複製は、1998(平成10)年5月、図書館開館1周年を記念して、佛教大学同窓会、鷹陵同窓会、通信教育部学友会、教育振興会から寄附されました。転輪蔵は、1回転させることによって、一切経を読誦したることと同じ功德を得られるといわれています。



1972(昭和47)年4月に開学60周年記念事業で完成した旧図書館

佛教大学附属図書館報『常照』第61号

発行日 平成26年10月23日
 発行者 佛教大学附属図書館長 谷口浩司
 発行所 京都市北区紫野北花ノ坊町96
 佛教大学附属図書館
 制 作 株式会社栄美通信

後記

佛教大学附属図書館報『常照』第61号をお届けします。紫野キャンパスのリニューアル工事に伴って、図書館の西側に建っていた4号館が解体されて、午後からは明るい日差しが入るようになりました。しかし、今まで建物に遮られて見えなかった左大文字を間近に眺めることができます。夕陽に映える学舎、とりわけ図書館は読書の秋を迎える季節となりました。